

vol.14

2008 spring

名古屋大学大学院
環境学研究科

環 KWAN

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

02 エコラボ トーク

技術効率×社会システム=転換

Technology Society Transformation

エルンスト・ウルリッヒ・フォン・ワイツゼッカー

井村秀文

06 環境学の未来予測 ②

脱温暖化都市をめざして

10 みる・きく・かたる 環境学

渡辺俊樹／村山顕人／青木聡子

13 インフォメーション

報告／これからの催し

15 名大くんが行く ②

表紙写真(撮影 藤田耕史)

奥は世界第5の高峰マカルー。手前は氷河末端にできたイムジャ氷河湖

今号の表紙から読み解く環境学のキーワード ②

1970年代に、研究室の先達が撮影したヒマ
ラヤの氷河を再び撮影するため、2007年秋
に朝日新聞の協力を得、ヒマラヤの空を飛んだ。
つい先日までの1か月、地べたを這いずり回り、
毎日首が痛くなるほど見上げた山々と氷河たち
を、まるで立体模型のように見下ろすのは、実に
不思議な感覚だった。

緑乏しく、岩と氷からなるヒマラヤの地である
にもかかわらず、その姿は我々の分類を拒むかの
ように、個性的で多様である。あるものはたおや
かで白く、あるものは荒々しく、谷を刻む。

せり上がる山々と、それを削る氷河とが、せめ
ぎ合う大地に流れる時間は、30年という時を経
てようやくとらえられるほどにゆつくりと、しかし
確実に流れている。

ヒマラヤの氷河たちは後退を続けている。しか
し、その姿と同様に、気候変化に対する氷河たち
の応答も多様である。「温暖化という言葉で片づ
けてはいけない。思考停止をしてはいけない。」

ヒマラヤの空でそう思った。

(地球環境科学専攻 藤田耕史准教授)